



Evaluation of surgical strategy based on the intraoperative superior oblique tendon traction test

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2017-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古森, 美和 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10271/3180 |

論文審査の結果の要旨

先天性上斜筋麻痺は、小児の上下斜視の原因として最も多い疾患であり、下斜筋減弱術が第一選択の治療となるが、それのみでは不十分な場合には追加手術が必要となる。申請者は術中の上斜筋腱の牽引試験により、下斜筋切除術単独、下斜筋切除術と上斜筋タック術(併用手術)を選択する手術戦略の有効性について後ろ向きに調査検討した。先天性または代償不全型上斜筋麻痺と診断され、牽引試験で上斜筋腱の緩みを認めず下斜筋切除術のみ実施した 48 例と、併用手術を実施した 17 例を対象とした。術前の上下斜視角は下斜筋切除術群[11.8 PD (prism diopters)]で併用手術群(27.2PD)より有意に小さく、平均矯正量は併用手術群(21.6 PD)が下斜筋切除術群(9.4 PD)より有意に大きかった。追加手術の必要性の有無を指標とした成功率は下斜筋切除術群で 89.6%、併用群で 82.4%であり、1 例あたりの平均手術回数は、下斜筋切除術群で 1.13 回、併用手術群で 1.18 回、全体で 1.14 回であった。大角度の上斜筋麻痺に対する手術適応については、一定の見解が得られていなかったが、本研究では上斜筋腱の緩い症例に対し初回に併用手術を施行することで 12.2PD の追加矯正効果が得られ、過去の報告と比較し 1 例あたりの平均手術回数を減らす可能性があることを明らかにした。特に術前の上下斜視角は小さくても牽引試験で上斜筋腱の緩みの強い症例が存在し、併用手術により改善したことは、手術治療選択における牽引試験の有用性を示すものとして高く評価された。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

| | | | | |
|---------|----|-------|----|-------|
| 論文審査担当者 | 主査 | 渡邊 裕司 | | |
| | 副査 | 椎谷 紀彦 | 副査 | 深水 秀一 |